曽良はサンチョ・パンサか？…芭蕉とスタインベック

前田圓

序

「沈める鐘」という唯一の共通点を手掛りに、芭蕉の『おくのほそ道』と、アイリス・マードックの現代小説『鐘』との関連を考察した前回の「二つの沈める鐘…芭蕉とマードック」が、まことに心細い試みであったのに較べれば、今から取り上げるアメリカ人作家ジョン・スタインベックの紀行文『チャーリーとの旅』（1960）と、芭蕉の『おくのほそ道』との間には、より多くの共通要素が存在する。そして、これら二つの東西の紀行文を結びつけて考える切っ掛けとなったのは、文芸誌『文芸春秋』（1986 年 4 月～8 月号）に、ドナルド・キーン氏が連載した『随想おくのほそ道』の第一回の文章であった。芭蕉の旅立ちについて、氏はこう書いている。

> …弟子が貸した「草の戸」を発った時、次の住人は自分と違い、娘もあって雛祭をする人だろうと思って俳句を作った　草の戸も住み替はる代ぞ雛の家。　芭蕉の人生は淋しかったが、古人が求めたものを自分で求めることは何よりの喜びであった。
>
> 旅の道連れは隣人の曽良という善意の男であった。芭蕉にはドン・キホーテ的な空想力があったが、曽良にはサンチョ・パンサの常識しかなかった。
>
> 『奥の細道』の数カ所に曽良の俳句が引用されているが、駄作ばかりである。四十年ほど前に曽良の「奥の細道随行日記」が発見されたが、処々芭蕉の日記と食い違う。俳聖として敬われた芭蕉も嘘をつくことがあったと曽良の散文的な記録によって分かった。曽良が　行く春や鳥啼き魚の目は泪　を読んだ時、きっと「しかし、先生、魚は泣きませんよ」と芭蕉の空想を正しただろう。

『おくのほそ道』での同行（どうぎょう）二人を、ドン・キホーテとサンチョ・パンサに譬えるなど、筆者には思いもつかぬことで、先ずこれに驚いた。そして、突然、昔読んだ本の中に、ジョン・スタインベックのアメリカ一周旅行をテーマにした『チャーリーとの旅』という紀行文があり、旅行に使ったキャビン付きのトラックの名がロシナンテ（ドン・キホーテの愛馬）、同乗者がチャーリーというプードル犬であることを思い出した。今回、『チャーリーとの旅』を読み直して、『おくのほそ道』との少なからぬ類似と、同時に大きな差異を発見して興味をそそられた次第である。

一

二百七十年の時を隔てて書かれた東西二冊の旅行記に関する私見を述べる前に、曽良の人柄と能力についてのキーン氏の評価には、些か承服しかねるところがあるので、取り敢えず曽良のために弁護しておきたい。

曽良は、芭蕉の信頼厚く、既に貞享四年（1687 年）八月の鹿島紀行の旅に、僧宗波（そうは）と共に芭蕉に随行している。二年後、元禄二年（1689 年）の奥の細道の旅には、曽良一人が

随行して、旅での日程・天候・景色・会った人々・宿舎・手違い・詠まれた俳諧等々を細大漏らさず記録している。これが「俳諧書留」を含むいわゆる『曽良旅日記』である。このため曽良は記録魔という芳しくない綽名を奉られたりしている。しかし、几帳面な曽良はこの旅のために周到な予備調査まで行っていた。即ち、神道の知識を生かして、前もって「神名帳抄録」、「歌枕覚書」（共に『曽良旅日記』に収録）等、旅先で尋ねるべき神社仏閣・歌枕を文献から検索した記録を旅に携行していて、芭蕉の旅での収穫に貢献している。旅行中は、日程の調整・宿舎の予約・諸経費支払い・対外交渉等など、曽良は一人でこなし、連俳には必ず参加している。今風にいえば、彼は、事務長・添乗員・連俳要員を兼ねた極めて有能なマルチ人間であった。もともと、彼に対する芭蕉の信頼は絶大であった。鹿島紀行、奥の細道の旅と、二回も芭蕉に随行したのは、数ある弟子の中でも曽良一人であることからもそれは分かる。

また貞享三年の『雪まろげ』には、芭蕉・曽良の「交わり金を断つ」親炙ぶりが、芭蕉自身の手で記るされている：

曽良何某、此のあたりちかくにかりに居をしめて、朝な夕なにとひつとはる。我くひ物いとなむ時は柴を折りくぶたすけとなり、茶を煮る夜きたりて軒をたゝく。性穏閑をこのむ人にて交金をたつ。ある夜、雪にとはれて

きみ火をたけよき物見せん雪まろげ

『おくのほそ道』<日光黒髪山>の章段でも、芭蕉は同行の曽良の性格・俳句の才能に言及している。

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更　曽良

曽良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく。このたび松島・象潟の眺め共にせん事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立暁髪を剃て墨染にさまをかえ、惣五を改て宋悟とす。仍て黒髪山の句有。「衣更」の二字、力ありてきこゆ。

<山中>で、体調を崩した曽良が、一時芭蕉と別れ先行する「隻鳧の別れ」の章段には、西行歌、蘇武の故事を引用しての芭蕉の潤色、そして彫琢の跡も目立つが、それにも拘らず、曽良・芭蕉の唱和句、更に<全昌寺>での曽良が別れてきた芭蕉を慕う句「終宵秋風聞くや裏の山」からは、この師弟の信頼と愛情が、尋常一様でなかったことが窺がわれる。

曽良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行々てたふれ伏すとも萩の原　　曽良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

尚、山中では、曽良のための餞別俳諧が催され、曽良は第二十句目で中座、出立している。この連句が餞別のためのものであったかには疑義も出されているが、曽良の不在の間芭蕉の世話をみることになった北枝が発句を詠み、送られる曽良が脇を、第三句を芭蕉が付け

ているので、餞別の連句であったに違いない。この歌仙には、芭蕉の添削が北枝によって記録されていて、芭蕉の直しのユニークさとともに、曽良、北枝句への評価もあって興味深い。

馬かりて燕追行(おいゆく)別れかな　　北枝

　みだるる山と直し玉ふ

花野に高き岩の曲がりめ　　曽良

　月よしと案事(あんじ)かへ玉ふ

月はるゝ角力に袴踏ぬぎて　　翁

　ともの字おもしとてやがてと直る

鞘ばしりしを友のとめけり　　枝

……

柴かりこかす峯のさゝ道　　翁

　柴かりこかすのうつり上五文字霰降ると有るべしと仰せられき

松ふかきひだりの山は菅の寺　　枝

　遊女と直し

役者四五人田舎わたらひ　　良

　落書にと直し玉ふ

こしはりに恋しき君が名もありて　　翁

　前句に心ありて感心なりと称し玉ふ

髪はそらねども魚くはぬなり　　枝

　さもありべし曽良はかくの処を得たりと称し玉ふ

蓮のいととるもなかなか罪ふかき　　良

　（以下略）

一方、同輩間での曽良評は如何であったか。門人で芭蕉のパトロンでもあった杉風は、元禄三年九月二十五日付け芭蕉宛書簡で「物覚えはよいが、前書など埒明(らちあき)申さず」と、曽良を貶めている。だが、そう言う杉風の句をランダムに抜いてみると、「がっくりと抜け初むる歯や秋の風」（初案「がっくりと身の秋や歯のぬけし跡」を、芭蕉添削）、「振りあぐる鍬の光や春の野ら」（類句、「動くとも見えで畑打つ男かな　去来」）、「子や待たんあまり雲雀の高あがり」（億良歌を下敷き）とお世辞にも冴えた句とは言えず、曽良を批評するほどの「才能は持ち申さず」といわれても仕方があるまい。しかしながら、杉風に限らず、蕉門での曽良の評価は芳しくなかったようである。現代でも、実務の才はあるが、文才には恵まれていなかったという根拠なき曽良像は、根強く生き残っているが、上述のように、芭蕉の評価はそれと異なっていた。

トナルド・キーン氏も、『おくのほそ道』での曽良の句を、「駄作ばかりである」と、ばっさり一刀両断にする。しかし果たしてそうしていいのか。先ず、『おくのほそ道』での

曽良の句、十一句を抜いて並べてみよう：

1　剃り捨(すて)て黒髪山に衣更(ころもがへ)

2　かさねとは八重撫子(やえなでしこ)の名成(なる)べし

3　卯の花をかざしに関の晴着哉

4　松島や鶴に身をかれほととぎす

5　卯花に兼房(かねふさ)みゆる白毛(しらが)かな

6　蚕飼(こがい)する人は古代のすがたかな

7　湯殿(ゆどの)山銭ふむ道の泪かな

8　象潟(きさがた)や料理何くふ神祭

9　波こえぬ契(ちぎり)ありてやみさごの巣

１０　ゆきゆきてたふれ伏すとも萩(はぎ)の原

１１　終宵(よもすがら)秋風聞(きく)やうらの山

以上十一句の中、現在『おくのほそ道』研究者が、芭蕉作と論証しているのは、１、２、４、５の四句で、それに曽良の元句に芭蕉の斧正が加わったとする９、１０の二句を合わせると、約半数に達する。芭蕉作説、斧正説の主だったものは、堀切実『おくのほそ道諸説一覧』、井本農一『日本古典文学芭蕉』、津守亮『おくのほそ道の読みと解釈』、尾形仂『おくのほそ道評釈』での諸氏の論である。このように現在、曽良句の半数までが芭蕉の手になると考えられていることからも、曽良の句を一概に「駄句」と裁断するのは、如何なものか。更に、詞書＋句の形で『おくのほそ道』を繋げてきた芭蕉にとって、状況にぴったりの道中吟がない場合、または曽良の句のほうが適切であると判断した時、芭蕉は少なくとも元禄六年の編集の最終段階では、躊躇なく曽良の句の採用に踏み切っている。２の「かさねとは八重撫子の名なるべし」は、芭蕉に道中句がなかったから、というより「かさね」なる少女の登場が芭蕉の虚構であったから句が存在しようがなかった。完成句とは言い難い此の曽良句は、『曽良書留』にも見当たらないが、旅行中の「何気ない曽良の言葉がそのまま発句になった」とする大輪靖宏氏説まである。3は、白河の関での芭蕉句は「早苗にも我色黒き日数哉」だったが、より優れた曽良の「卯の花をかざしに関の晴れ着かな」に差し替えたものであった。松島でも同様に、完全主義者の芭蕉は不出来な自作、「嶋々や千々にくだけて夏の海」、「あさよさを誰まつしまの片心」、あるいは「松島や夏を衣装に月と水」を引っ込めて「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」と曽良の句を採用した。

二

完全なフィクションであったアイリス・マードックの『鐘』の場合と異なり、ともに奥羽一周、アメリカ一周の旅での体験を素材に、記録もの風に旅の印象を綴る『おくのほそ

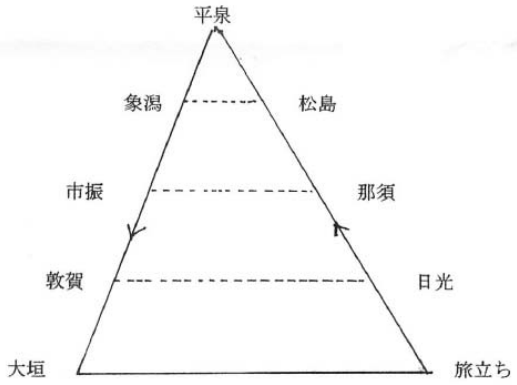
道』と『チャーリーとの旅』には、多くの共通点が見出される。その第一は、作品構成法の類似である。両作品とも旅立ちから帰郷まで、旅行の日程に従って、訪れた各地の景色・出来事を日記風に記録し、それらをオムニバス式に繋いで全編を編成している。

俳文で書かれた『おくのほそ道』の構成に関しては、全編を通じて連句的付け合いの意識が働いているとする「連句的構成説」と、旅程を中心に分類する「三分法」、「円弧説」「三角形説」、「前後対照説」、「二部構成説」等があるが、ここでは、『チャーリーとの旅』と旅程の点で共通するものとして、尾形仂氏の「三角形構図説」を採っておこう。因みに、芭蕉とスタインベックの旅は、ともに反時計回りである。

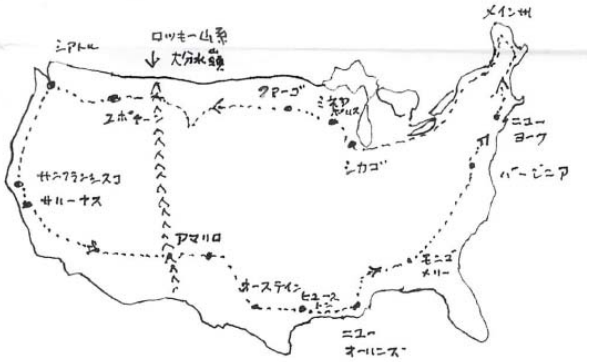
尾形氏は、「三角形構図説」を説明して、旅立ち「行く春」の「首」と大垣の「行く秋」の「尾」を三角形の底辺の両端に、全編の主題が語られる「平泉」の章段を頂点と定め、頂点に向かう前半部には「前途のはるけさ、行路の艱難」を、頂点から下る後半部には、「人々との出逢いと別れ」をとらえ、さらに底辺部には、その漂泊の世界観・人生観としての「不易流行」の思想を汲み取っていくものと論じている。

『おくのほそ道』

（三角形構図説）



『チャーリーとの旅』



ただ、このように旅行先に従って『おくのほそ道』全編を４６乃至５２の章段に区切るのは、研究者の便宜上の手段であって、『おくのほそ道』原本は、連続して切れ目なく書かれており、また、この「三角形構図説」その他の説が主張するような、整然たるシンメトリーをなす章段意識が芭蕉本人にあったが否かは疑わしい。この旅程による構図に、連句的構想を重ね合わせると、日光と敦賀は「神社」、那須と市振は「恋」、松島と象潟は「名勝」、武隈と月山は「花」と、三角形の右辺・左辺（往路・復路）間に一応の対応が成立する。

『チャーリーとの旅』も、作者ジョン・スタインベックが、アメリカ合衆国一周の旅の印象を日程を追って記録した紀行文である。しかし、この作品に関しては、『おくのほそ

道』ほど組織的な研究は進んでおらず、構成についての説の有無はよく分かっていない。四つの部からなる『チャーリーとの旅』も、切れ目なく、またキャプション（見出し）もなしに書かれている。構成の内容に関しては後で詳述するが、ページ数からみた構成は、第一部６％、第二部３７％、第三部３７％、第四部２０％となる。『おくのほそ道』が、読者や研究者の便宜のため、旅先の名を「小見出し」にした５０余りの章段に区分けされているように、『チャーリーとの旅』でも、手元にある日本語訳者大前正臣氏は、「読み易くするための便宜上の措置」（『チャーリーとの旅』大前訳　サイマル出版　訳者前書）として四つの部に、原書にはない日本語での「大見出し」を施し、それらを再分割して「中見出し」を、再々分割して「小見出し」を付ける。例えば第二部は、先ず「ニューイングランドと中西部」（大見出し）とし、分割して（中見出し）の「ロシナンテ号で出発する」、「敬虔な森の人々」、「カナック一家との一夜」、「税関での押し問答」、「素朴さへの郷愁」となる。更に、中見出しの初めの「ロシナンテ号で出発する」は、さらに十一もの小見出しに細分される――「ロシナンテ号で出発」、「男は赤ん坊か」、「潜水艦と青年」、「昼下がりの酒屋で」、「野放図な豊かさ」、「街道の仁義」、「何が起きるか分からない」、「ニューイングランド人の寡黙」、「バーモントの秋」、「余の風貌」、「貴婦人とのトラブル」。残りの中見出しも、同様に十くらいの小見出しに分かれる。大前氏のこのように大・中・小の見出しを施す方針は、全編を貫いている。スタインベックの原作にはないこういった区切りと見出しは、確かに便利と言える。小見出しをもった一つの区切りは、即、旅での一エピソードであり、『おくのほそ道』での５０余の章段に対応するからである。一エピソードは、短いものは半ページ、長くても２ページを超えることは滅多にない。

『おくのほそ道』の行程を「三角形構図説」で眺めると、平泉を折り返し点とする三角形をなし、雰囲気の異なる往路と復路に分かれていた。同様に、『チャーリーとの旅』にも、分量的に殆んど中間の点、イリノイ州のシカゴに、全編を二分する区切りがあるようにも見える。スタインベックは、ニューヨークを出発してから、先ずニューイングランド諸州に赴く。特にメイン州では、カナダ国境近くまで北上して、必要以上に熱心に、そしてゆっくりと時間をかけて、この土地の風景を観察し、あらゆる階層の人々と会話を交わし、それをまた、克明に記録するように見える。彼が旅を始めるに当たり、何はさて置き、このようにアメリカ発祥の地ニューイングランドに固執したのは、芭蕉が、白河の関を見ることを旅の目的にあげたように、それが旅の目的・内容に関係するものだったからではあるが、それにしても中西部の入り口シカゴに辿り着くまでの、ニューイングランドへのスタインベックの拘りと身の入れようは異常である。それかあらぬか、反動がくる。折り返し点シカゴを出ると、途端にスタインベックの足が速まり、第三部では中西部都市・プレーリー（大草原）・西部大平原・西部山岳地方・大分水嶺・西海岸・ニューメキシコまで一気に走破する。第四部では、スタインベックは、駆け足で、アメリカで最も個性的なテキサス州と、折りしも黒人学童入学問題で大揺れに揺れていた深南部のニューオーリーンズの二箇所を経巡り、バージニアから先は、脱兎の如く一直線に帰宅する。彼は、この間

の事情を説明する。(引用は、John Steinbeck *Travels with Charley—in Search of America,* PenguinClassics 2000 からのページ数、日本語訳は拙訳、以下同じ)。

> Starting on my return journey, I realized by now that I could not see everything. My impressionable gelatin plate was getting muddled. I determined to inspect two more sections and then call it a day—Texas and a sampling of the Deep South. From my reading, it seemed to me that Texas is emerging as a separate force and that the South is in pain of labor with the nature of its future child still unknown. And I have thought that such is the bitterness of the labor that the child has been forgotten. This journey had been like a full dinner of many courses, set before a starving man. At first he tries to eat all of everything, but as the meal progresses he finds he must forgo some things to keep his appetite and his taste buds functioning. (p.160)
>
> 帰路につく前、何でも見て帰ることは不可能と気付いた。私の頭の感光板は混乱してしまっていた。だから後、二箇所――テキサスと深南部を見て、それで終わりにしようと決めた。私の読んだところでは、テキサスは新興勢力として発展しており、深南部は、どんな子が生まれてくるか分からないまま、陣痛の苦しみの最中にあるようだ。そして陣痛が余り激しいので、生まれてくる子供のことは、すっかり忘れられているように思われる。今回の旅は、飢死しかかっている人の前に出されたフルコースの晩餐みたいなものだ。最初は、出てくる皿を片つ端から食べようとするが、食事が進むにつれて、食欲を失わないためには幾つかを控えねばならないと気付く。そこでやっと味覚が働き始める。

『おくのほそ道』と『チャーリーとの旅』との第二の共通点は、旅行のテーマ、旅行の動機及び目的地の類似である。『おくのほそ道』のテーマは、先学たちが説くように、序章での漂泊の思想と、平泉の章で見られるような不易流行の世界観を、芭蕉が奥州行脚の旅において思索し続けた記録である。一方『チャーリーとの旅』のテーマは、副題にいうアメリカ再発見—アメリカとは何か、アメリカ人とは如何なる国民であるかを、スタインベックが、アメリカ全土を実際に見て回り、各州で出会うアメリカ人との触れ合いを通じて発見することであった。スタインベックは、卓越した観察力、ユニークな人生観、辛辣なユーモアを武器に、工業化で急激に変貌し、環境汚染、都市集中と村の過疎化、文化・言語の画一化が不可逆的に進行しつつあった６０年代初頭のアメリカ社会での、変動する諸現象の根底に存在する不変のアメリカ的なもの、当時の流行語「アメリカのアイデンテイテイ」を見出そうとしていた。

旅への誘(いざな)いに関しても芭蕉は、「そぞろ神の物につきてこころを狂わせ」と語り、スタインベックは、「放浪のウィルスが気紛れ者に取付く」と、ともに、旅行への誘いが不可抗力的に人に取り憑く魔物であることを、些か韜晦気味に語る。芭蕉は貞享元年（1685）の「野ざらし紀行」の旅の二年後、「笈の小文」の旅に出る。その疲れも癒えぬ元禄元年に、はや新たな奥羽地方への旅への誘惑に駆られ、翌二年には曽良を伴って旅立つ。

<序章>　月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそわれて、漂泊の思ひやまず。海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるわせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかず、もも引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸をすゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

２７０年遅れて、ジョン・スタインベックが、アメリカ合衆国３８州をキャンピングカーで巡る１６，０００キロの大旅行に出かける。『チャーリーとの旅』も冒頭で、５８歳の彼が、たった一人でこのハードな旅行を決意した理由、旅の目的、計画等を語る。芭蕉が旅の誘いを「そゞろ神に取り憑かれ」とお道化たように、スタインベックもそれを“urge”、“itch”、“fever”と呼ぶ。夫々「駆り立てるもの」、「うずうずする欲望」、「熱に浮かされたような状態」くらいの意味だが、英語には、同一語の繰り返しを嫌い、二度目からは必ず同義語に置き換えるという不文律がある。ここでも、言い直すに従って、次第に諧謔味が加わるのは、『おくのほそ道』の場合と同様である。

When I was very young and the urge to be someplace else was on me, I was assured by mature people that maturity would cure this itch. When years described me as mature, the remedy prescribed was middle age. In middle age I was assured that greater age would calm my fever and now that I am fifty-eight perhaps senility will do the job. Nothing has worked. Four hoarse blasts of a ship's whistle still raise the hair on my neck and set my feet to tapping. The sound of a jet, an engine warming up, even the clopping of shod hooves on pavement brings on the ancient shudder, the dry mouth and vacant eye, the hot palms and the churn of stomach high up under the rib cage. In other words, I don't improve; in further words, once a bum always a bum. I fear the disease is incurable. I set this matter down not to instruct others but to inform myself. (p.3)

私が子供の頃、どこか遠いところに行きたくて仕方がなくなると、大人たちは、大きくなったら、そんなうずうずは治るよと言った。成人になると今度は、中年になると治ると言った。中年になると、老年になったら熱はおさまると言った。今、私は５８歳、うずうずはとうになくなっている筈なのに、病気はいっかな治っていない。出航の汽笛が嗄れ声でボーッと四回鳴ると、私の首の毛は逆立ち、両足は足踏みし出す。ジェット機の音、車のエンジンの始動音、舗道を行く馬の蹄の音を聞いただけでも、子供時代のあの戦慄が甦り、口は渇き、目は虚ろ、手は火照り、胸が騒ぐ。私は変っていないのだ、もっと言えば風来坊は何時まで経っても風来坊なのだ。これは不治の病である。こう書くのは、人様に教えるためでなく、自分自身に言い聞かせるためである。

漂泊の旅で、歌枕の地を訪れ、古来の伝統文化の今も残る息吹に接して、人生と自らの心を深く観照する『おくのほそ道』の文体が、“retrospective”(回顧的)、“introspective”(内

省的）であったのと対照的に、社会批評的性格の強いスタインベックの『チャーリーとの旅』の文体は、より“extravert”(外向的)で,“critical”(批判的)である。聞き手を意識した創作意識は、上の引用の最後にも顕著であり、ユーモア精神の現われの一つ、ジョークを含む“future - oriented”(未来志向的な)語りも随所に見受けられる。

芭蕉もスタインベックも、また旅支度に触れる。十七世紀末の、徒歩旅行が主体の『おくのほそ道』では、「股引の破れを綴り、笠の緒を付け替え、三里に灸を据え」となり、一方二十世紀中葉のスタインベックは、自動車製造工場に、特別仕様のキャビンを搭載した０．７５トン積みの小型トラックを、別注で作らせ、「背中に甲羅を背負った海亀のように、自給自足の単独行に出かける」（ｐ6)。ベッド・キッチン・冷蔵庫・トイレ・発電機一式を装備したこのキャンピングカーが「ロシナンテ号」で、随行するのがプードル犬チャーリーである。

類似点の最後に、旅につきものの「離別」のシーンと、旅全体の基調をなす「図案（デザイン）（形態、設計図)」での相似を見てみる。これらは類似点であると同時に相違点でもある。先ず『おくのほそ道』では、友人・弟子たちとの別離の悲しみが、来るべき長旅への不安ともども語られ、留別の句で締めくくられている。

上野・谷中（やなか）の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつましきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千住（せんじゅ）と云（いふ）所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゞぐ。行春や鳥啼魚の目は泪。

親しきものたちとの別離に際し、芭蕉は、「心細し」、「胸塞がり」、「泪を注ぐ」と、感情をそのまま吐露する。哀れ、悲しみに涙して憚らないのは、日本詩歌の伝統であった。

片や、スタインベックは、一人で旅立つ。妻のエレーヌだけが見送りに来る。別れは淡々と語られる。

陽光の中に少し黄色っぽい気配のある晴れた朝が来た。妻と私は慌しく別れた。二人ともさようならを言うのが嫌いで、相手が去った後ポツンと取り残されたくなかった。妻は車を急発進させニューヨークに向けてエンジンの音高く帰って行き、私はチャーリーを横に座らせて、ロシナンテ号を運転して先ずシェルターアイランド渡船場に向かった（ｐ18)。

一人前の男は人前で喜怒哀楽の感情を直（じか）に見せるものではないと、いわゆるマッチョ（男らしさ）の美徳を教え込まれてきたアメリカ人スタインベックにとっては、別離に際しての愁嘆、特に涙は禁物であった。悲しみはスタインベックによって韜晦されている。東洋と西洋では、別離の表現は、ベクトルの向きが正反対になるのである。スタインベックのもう一人の肉親との別れの場面を引用しよう。最初の目的地メーン州に入る前に、スタインベックはマサチューセッツ州デイアフィールドに、息子が入寮しているイーグルブルック校に立ち寄る。ここでも親子の別れは素っ気ない、スタインベックは再度韜晦する。

私はイーグルブルック校訪問のことは余り書きたくない。冬学期という刑期が始まったばかりの２００名の十代の教育服役囚にロシナンテ号が齎した影響は御想像がつくであろう。彼らは大挙して、時には１５人も、狭いキャビンに押しかけ、慇懃な呪の目で私を睨んだ。私は自由に飛びまわれるのに、彼らにはそれが出来ないからである。息子は此の事で私を決して許さないであろう。出発して少しして、私は車を停め、密航者が潜んでいないことを確

かめた（p 23)。

次に、旅の「図案（デザイン）」（形態）であるが、スタインベックが使う「デザイン」という生硬い言葉は、スタインベックの旅行の最初にして最重要の寄港地、そこに行けば旅行全体の意味・目的・性格がはっきりする「場所」と、そこで明確になる旅の「性格」の二つを意味している。『おくのほそ道』では、この「デザイン」の土地は、白川の関であった。「心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定まりぬ」と芭蕉が言うように、そぞろ神に誘われて目指した第一の目的地白川の関は、三千里の奥羽の旅への真の入り口で、この関に立って芭蕉の心は、初めて旅の真の形態に開眼した。ここに辿り着いて、旅の意味が芭蕉には明らかになり落ち着いた、即ち芭蕉の「旅心が定まった」のである。

スタインベックにとって「デザイン」の地はメーン州である。アメリカ一周の旅に出た彼の足取りは、ニューイングランド諸州、とくにメーン州で停滞する。『チャーリーとの旅』の三分の一近くがメーン州に関するもので、スタインベックは、メーン州の光景・人物の報告に異常なまでの執心を見せることは既に述べた。それは、偏にメーン州こそが、スタインベックの「旅心は定まる」土地だったからに他ならない。彼は、メーン州の意義を、英語に該当する言葉がないスペイン語の動詞“vacilar”から説明し始める。その現在分詞は“vacilando”だが、英語の“vacillating”（ゆらゆら揺れ動く）とは、意味が大分違う。人間が“vacilando”（迷う状態）になると、彼が行こうとする方角は、一応定まってはいるものの、目的地に着く着かぬは気にしないのだ、とスタインベックは言う。

私は西に向かう前にメーン州という屋根（棟木）から旅を始めたかった。そうすれば、旅に形態（デザイン）が出来る。世界のあらゆるものは形態を持たねばならぬ。さもないと人間精神はそれを受け付けない。更にあらゆるものは目的を持たねばならない。でないと、人間の意識はそれから離れる。メーンは私の形態であり、ジャガイモは私の目的であった。もし一個のジャガイモも見なかったとしても、“vacilador”（迷える人？）としての私の身分に変化はなかったであろう。ところが実際は、私は必要以上のジャガイモを見ることになった。山のような、大洋のような、全世界中の人間が百年かかっても食べきれないほどの厖大な量のジャガイモを見た（p50)。

芭蕉が、奥羽の入り口、白河の関で、古来の文学的伝承を散文に読み込み、「卯の花をかざしに関の晴着かな」の曽良句で関越えの挨拶をしたように、スタインベックは、アメリカ発祥の地と目（もく）するメーン州で、素朴で陽気なカナダ人季節労働者一家と幸福な一夜を共にすることで、それ以後のアメリカ一周の旅を予祝する。旅でのエピソードは、たとえ特筆すべき事件であっても、描写を短く切上げるスタインベックが、このフランス系カナダ人（カナック人）一家とのエピソードには、例外的に６ページをも割いて、短編小説にも似た結構で物語る。手短にあらましを書く：

私（スタインベック）は、晩秋のメーン州に国境を越えてカナダから出稼ぎに来たカナック人一家が、トレーラーを湖の岸に停め、キャンプ用テントで料理しているのに興味をそそられる。先ずチャーリーを大使として派遣し、犬が迷惑を掛けなかったかを尋ねる口実でテントに近づき、チャーリーがフランス生まれと言って喜ばせ、その晩一家をロシナンテ号に招待する。家長、三人の息子とその嫁たち、二人の青年と三人の女の子の計十二人全員が、ロシナンテ号に押しかけてくる。狭いキャビンに半分座り、残りは立ったままで、ビールやソーダ水で、乾杯。取

って置きのフランス製シャラント・コニャックの栓が抜かれ、フランス語と英語が飛び交う賑やかな宴会となる。翌朝早発ちの私（スタインベック）は、まだ寝ているカナック一家に、コニャックの空き瓶の首にメッセージを書残して行く。*“Enfant de France, Mort pour la Patrie”*「*フランスで生まれしもの、祖国のために死す*」。（ｐｐ．５１－５５）

三

これから先は、東西二つの紀行文での差異、それも顕著なものだけに限って述べたい。前回のマードックの『鐘』が３００ページと大部であったように、『チャーリーとの旅』も、原文で２００ページを超える比較的長大な紀行文である。コンパクトな俳文にまとめられた『おくのほそ道』とは、分量に格段の差があり、文体も、より散文的、説明的、細目的である。然るに、文学的遺産への言及は、簡潔な芭蕉の旅行記の方が圧倒的に多い。『おくのほそ道』は、どの章段を開いても、直接・間接に、宗祇、西行、古今集から新古今集までの和歌集、平安期の歌物語、源氏物語、さらに万葉集からの引用・言及が、至る所に鏤められている。

一方、スタインベックの２００ページに及ぶ『チャーリーとの旅』では、我々が聖書やチョーサー、シェークスピアからの引用はおろか、アメリカの先行文学への言及に接することは殆んどない。「我々の先祖が、ヤコブが天使と格闘したように、アメリカ大陸と格闘して、遂に勝利を収めた」と比喩の引き合いに出されたり、ドワイト・Ｄ・アイゼンハワーが、英国王室の遠い血を引いているという俗信が、歴史と文化遺産を持たないアメリカ人の劣等感であることを、後のアーサー王物語の原型になった十二世紀英国のモンマスのジェフリー著『英国国王の歴史』に準えて皮肉るといった断片的引用を除いて、過去の文学的遺産は、『チャーリーとの旅』には、殆んどその痕跡を辿ることが出来ない。ジョセフ・アデイスン、ロアーク・ブラッドフォード、ルイス・キャロルは、ただ名前が出てくるだけで作品への言及は皆無であり、二十世紀アメリカの同時代作家では、『メイン・ストリート』のシンクレア・ルイスと、『汝、再び故郷に帰ることあたわじ』のトーマス・ウルフが出るが、それはこの二人の作家が、生まれ故郷ミネソタ州ソークセンター、ノースカロライナ州アッシュヴィルを批判したため、故郷で疎まれた人物として語られるにしか過ぎない。しかも、それは、カリフォルニア州モンタレー出身のスタインベック自身の久しぶりでの里帰りでの昔の友人との疎外感、町並みへの違和感の引き合いにされている。文学遺産への関心の希薄さは、『チャーリーとの旅』では、先行する小説や英詩からの直接の引用がたったの一箇所もないことにも端的に現われている。

芭蕉とスタインベック作品間のこうした差異は、然しながらまた、両作者の旅での「視点」の違いに起因するものでもある。視点の差は、旅の「形態（デザイン）」の差異から起こる。先述したように、『おくのほそ道』の形態、そして旅する芭蕉の視線は、内省的、懐古的であり、『チャーリーとの旅』でのそれは、外向的、社会批評的であった。芭蕉が目前の風景・人

物に、絶えず過去の出来事・人物の幻影を重ね合わせて、流転してやまない人々の営みの中に不易の実相を見極めようとしたのに対し、スタインベックは、１９６０年代のアメリカ社会が経験しつゝあった資本主義の鬼子、大量生産・大量消費経済の下での激動・変化を直視し、危惧の念をもって観察し、解決策を模索する。スタインベックは、処女作『勝敗なき戦』(1936) で、工場ストライキをテーマにした社会批評的作品で作家活動をはじめ、三年後の１９３９年には、オクラホマの土地を追われてカルフォルニアに夢を求めて移住したジョード一家の悲惨な末路を描いた『怒りの葡萄』で、自然と文明、夢と現実の相剋をテーマに再び取り上げていた。この相剋のテーマと、社会・文明批評的精神は、今回の『チャーリーとの旅』でも健在で、紀行文のルポルタージュ風の記録の基調は、アメリカ社会の現況での錯誤・不当・不正への告発・批判及び是正への希望や提案となる。それを伝達する文体は、“prosecutive”（告発的）で、また“prophetic”（予言的）となる。もちろん、社会批評的以外の、視点からの観察と思索も、『チャーリーとの旅』には存在していて、それが単調さを防いでいる。スタインベックは、１９６６年、『アメリカとアメリカ人』という『チャーリーとの旅』の続編を表わした。しかし、アメリカ国民性、政治制度、黒人問題、アメリカ社会を襲う病気と将来像等を、終始硬いエッセイ風の文体で論じたこの随筆『アメリカとアメリカ人』は、前作１９９２年の『チャーリーとの旅』がもっていた多彩な語りの齎す魅力を失って、作者の意気込みとは裏腹に、文章は単調であり、論調は不思議に迫力と説得力に欠ける。もし仮に、芭蕉が『去来抄』や、『三冊子』で、弟子の伝聞として残る俳諧に関する論を、彼自身の言葉で一冊の俳諧論に纏め上げていたなら、恐らくそれは、スタインベックの場合同様、単調で変哲に欠けるものに仕上がっていたであろう。理論の開陳に終始する理論書や思想書、そして随筆ですらも、実作の句を織り込んだ俳文や、旅先での住民との対話を交えた紀行文ほど魅力的ではありえないのである。

『チャーリーとの旅』は、先ず、人間存在への哲学的・文明論的思索が語られると同時に、訪れる州毎の風景描写・人間観察などが、州ごと地域ごとの変化をつけたスタインベックの闊達な散文で提示されていた。旅の記録には、ほとんどの場合、地元の一般庶民が登場し、交わした会話が、ときには少々潤色されて、生々しく記録される――農場主、ハイウェイ沿線のレストランの給仕女、トラック運転手、モービルホームの夫婦、不在地主に雇われた森番、ガソリンスタンドの主人、旅芸人、税関の役人、パーテイの客人、ヒッチハイクで乗せた白人そして黒人等との対話は、ある時は作者を面白がらせ、ある時は怒らせる。そして、芭蕉が散文で語る紀行文の各章段の終わりに発句を置いて締め括りにしたように、スタインベックは、各々のエピソードをジョーク、時には警句で締め括る。この形式（パターン）は『チャーリーとの旅』の文体の魅力の最たるものであるので、実例を幾つか紹介する。最初は、ニューハンプシャー州ホワイト山系の農場主と私（スタインベック）の対話である：

「(私) 今日、ラジオ聞きました？」。　「(主人) 五時のニュースをね」。　「国連で何かありましたか？聞き損っ

たのですよ」。　「信じないかもしれませんが貴方、ミスター・K（フルシチョフ）が、靴を脱いで演壇を叩いたんですよ」。　「へえー、そりゃ又どうして？」。　「言われたことが気に入らなかったからでしょう」。　「妙な抗議の仕方があるもんですね」。　「でも、注目は引きましたよ。ニュースはそのことで持ちっきり」。　「（議長用の）槌を持たしとくべきだったんです、靴を脱がなくて済むように」。　「そりゃ、名案です。靴の格好の槌だったら、決まり悪がらなくて壇が叩けますからな」。（ｐ25）

次は、ハンテイング・ブームへの皮肉である。秋の狩猟解禁の季節が巡ってきて、スタインベックとチャーリーの行く先々の野や山に、ハンターたちの銃声が響く。ハンテイングは、男らしさの証明とばかり、上手下手お構いなしに、アメリカの男性は、高性能のライフル銃を持出して、動いているものは何でも撃つ。時々仲間同士で殺しあうこともあるが、これは人口増加の歯止めになるので問題ない。だが、牛、豚、農夫、交通標識まで、虐殺の対象となると、危険極まりない。大柄なチャーリーは、狩猟期間中、尻尾に赤い化粧紙をゴムバンドで結わい附けられる羽目になった。白色の紙では、鹿の尻と間違えられる。

しかし、この狩猟熱から慎み深い収入を得た人がいた。カリフォルニアのサリーナスに李さんという中国人コックがいて、農場の鹿の形の立ち木に猟銃の鉛の散弾が打ち込まれるのを知って、シーズンが終わると鉛を掘りだして小遣い銭を稼いだ。立ち木が射抜かれて倒れると、李さんは砂袋を四つ積み、その上に鹿の角を載せた。砂袋を５０個にすれば、一財産築けたのに、慎み深い李さんは大量生産には興味をもたなかった。（ｐ４６）

スタインベックは、都市の肥大化と近接する村の過疎化の傾向を観察する。彼はこれは観察で社会批評ではないと断っているが、現状分析と近未来予言の正しさは、７０年代から始まった環境汚染への意識の高まりと環境保全運動、そして、６０年代末には全米的社会現象になった大都市脱出のサバービア（郊外族）発生への予告となったことは、その後の歴史が証明するところである。

The new American finds his challenge and his love in traffic-choked streets, skies nested in smog, choking with the acids of industry, the screech of rubber and houses leashed in against one another while the townlets wither a time and die. And this, as I found, is true in Texas as in Maine. Clarendon yields to Amarillo just as surely as Stacyville, Maine, bleeds its substance into Millinocket, where the logs are ground up, the air smells of chemicals, the rivers are choked and poisoned, and the streets swarm with this happy, hurrying breed. This is not offered in criticism but only as observation. And I am sure that, as all pendulums reverse their swing, so eventually will the swollen cities rupture like dehiscent wombs and disperse their children back to the countryside. This prophecy is underwritten by the tendency of the rich to do this already. Where the rich lead, the poor will follow, or try to. (p56)

大きい街が、ますます大きくなるのに、村々は痩せ細る。村の零細な八百屋・雑貨屋・衣料店はスーパーマーケット、チェーンストアとの競争に負けた。村の住民は今や大都会のざわざわした乳房に群がっている。新しい種族の

アメリカ人は、一方では小さい町や村が萎びて死んでいるというのに、交通混雑で窒息しかけた道路、光化学スモッグの充満する空、車のブレーキの金切り声、数珠繋ぎの住宅に、生き甲斐と愛情を見出している。事情は、メーン州でもテキサス州でも同じである。メーン州ステイシイヴィル村がミリノケット市に血液を吸い取られたように、テキサス州でもクラレンドンがアマリロ市に吸収される。ミリノケット市では、製材所で鋸が唸り、大気は化学薬品の匂いがし、河川は毒液で汚染され窒息しかかっているのに、街には人々が嬉しそうに足早に歩いている。是は、批評でなくて、観察を述べただけである。でも、私は、全ての振り子が逆方向に振れるように、今にこの膨れ上がった都市は、裂開性の子宮のように破裂して、やがて乳房に群がっている子供たちを田園へ散らすであろう。この予言は金持ちが既にそうしているという事実によって保証される。金持ちがすることを、貧乏人は真似する、あるいは真似しようとするからである。

「ナイアガラの滝」の章段は、ペンキンブックス版の「序文」で、ジェイ・パリニイが、、スタインベックが、想像力を駆使して、「税関の役人との愛らしくも可笑しい遣り取りを、対話によって描き出したもので、始まり・中間部・終わりをもっていて、一編の短編小説になりうる資格を備えている」と評しているものである。エピソードは、例によって“frivolous”（軽佻）　な散文で始まる。

ナイアガラの滝は、大変立派である。タイムズ・スクエアにあったボンド衣料品の看板を大掛かりにしたようなものだ。見てよかった。というのは、今後は、ナイアガラの滝を見たかときかれても、「見た」と答えて、一度くらいは本当の話が出来るからである　…さて長い経験から、私は全ての国家は尊敬するが、全ての政府は大嫌いである。そして、辛抱強い有能な公務員が出入国・税関の任務を遂行している国境におけるほど、私の生まれつきの無政府主義が頭を擡げるところはない。私は生まれてこの方、一度も密輸入をしたことがないのに、税関に近づくと何でこんなに罪の意識に駆られるのであろう。（ｐ６６）

ナイアガラの滝はアメリカとカナダの国境をなしていて、滝に架っている橋には、両国の出入国・税関の事務所がある。折りしも暇な時間帯で、カナダの役人は親切で、スタインベックに紅茶一杯、チャーリーにはクッキーを六個も振舞ってくれる。そして、チャーリーの狂犬病の予防注射証明書がないから、カナダ側へ出ないほうがよい。でないと、アメリカ側に戻ってきたときトラブルが起きると忠告してくれる。Ｕターンして、星条旗の立っているアメリカ入国管理事務所に差しかかると、果たせるかな、アメリカの役人は峻厳であった。

「アメリカ市民ですか？」。「はい、これがパスポートです」。「申告するものがありますか？」。「向こうには入りませんでした」。「この犬の予防接種証明はお持ちですか？」。「犬も出国していません」。「でもカナダから来たじゃありませんか？」。「カナダ領には入っていません」。役人の目に鋼鉄のような冷たい色が浮かび、眉が胡散臭そうに顰められた。時間節約のつもりだったのに、これでは、ペンシルヴァニアのエリーを回るより時間がかかりそうだ。「ちょっと、事務所に入ってください」。この言葉は私にはゲシュタッポのノックの音みたいな効果があった。それはパニックと怒りと、何もしていないのに罪悪感を惹き起こした。正義の怒りで私の声は上ずった。と、それがまた疑惑を高める。「どうぞ、中へ」。…（ｐ６７）

国境を越えていなかったスタインベックとチャーリーは、結局無罪放免になるが、その前

に検査官は、パスポートへの電話番号の落書きを見つけて、たっぷりスタインベックの油を絞る。役人から受けた屈辱感から立ち直ろうと、チャーリーとスタインベックは、その晩、最高級のオート・コート（モーテル）に泊まり、大散財をする。

I ordered ice and soda and made a scotch and soda and then another. Then I had a waiter in and bespoke soup and a steak and a pound of raw hamburger for Charley, and I overtipped mecilessly. Before I went to sleep I went over all the things I wished I had said to that immigration man, and some of them were incredibly clever and cutting. (p69)

私は氷とソーダ水を注文してスコッチのハイボールを作って二杯も飲んだ。それから、ボーイを呼んで、私にはスープとステーキを、そしてチャーリーのために一ポンドの生のハンバーグを注文し、無茶苦茶にチップをはずんだ。眠る前にあの税関の役人に言ってやりたかった言葉を総浚(そうざら)えしたが、そのうちの幾つかは、信じられないほど気が利いて痛烈なものであった。

四

連句的構成での恋のモチーフを読み取ることも、強(あながち)ち不可能ではなかった『おくのほそ道』と、そもそも連句的発想など全くもたない『チャーリーとの旅』との間に、「恋のモチーフ」の対応があると主張したら、きっと大方の失笑と顰蹙(ひんしゅく)を買うであろう。しかし、恋のモチーフは、とかく殺伐で単調に流れがちな旅行記に華やぎの変化を齎すもの、ともすれば禁欲的な旅行記の息抜きの段と思って寛恕頂ければ幸いである。

『おくのほそ道』に登場する女性は、<那須>で馬の後を追いかけてきた「かさね」という少女、越後路の<市振>で会った二人の遊女、それに<福井>での等栽の妻の四人しかない。一方男性はというと、芭蕉は行く先々で数多くの男性と接触を重ねる。<日光>仏五左衛門、<那須>草刈の男、<黒羽>秋鴉・桃翠兄弟、<殺生石>馬の口付の男、<須賀川>等窮、<宮城野>画工加右衛門、<末の松山>琵琶法師、<尿前の関>道案内の若者、<尾花沢>清風、<最上川>大石田連衆、<羽黒>図司左吉、<月山>強力の男、<酒田>長山重行、<金澤>可処・一笑、<全昌寺>寺僧、<天竜寺>北枝、<福井>等栽、<敦賀>出雲屋弥市郎、<種の浜>天屋五郎右衛門、<大垣>路通・越人・如行・前川子・荊行父子。

『チャーリーとの旅』では、その社会批評的性格から、各章段に例外無しに土地の人々との出会いが描かれる。非番の潜水艦乗組員、酒屋の主人、ウェイトレス、農場主、牧師、トラック運転手、貴婦人、役人、獣医、警官、昔の友人、旅芸人、ガソリンスタンド経営者等々、ありとあらゆる階層・職業の男女との接触と邂逅は、アメリカ人を知るための必須条件であった。性格差のなくなっていた６０年代のアメリカ社会の探訪記『チャーリーとの旅』では、従って、随所に女性への言及が見出せるが、『おくのほそ道』での女性の登場する章段とうまく対応するものを探し出すのは困難を通り越して、絶望的である。しかし、無理を承知で強引に結びつけたのが、次の三つのペアである。

	『おくのほそ道』		『チャーリーとの旅』
A	<那須>少女「かさね」	:	＜ニューハンプシャー＞「貴婦人とチャーリー」
B	<市振>「遊女」	:	＜シカゴ＞「ハリーとルシル」
C	<福井>「等栽の妻」	:	＜テキサス＞「テキサス生まれの妻」

Aの「貴婦人とチャーリー」は、ニューハンプシャーのとある駐車場での出来事である、着飾った貴婦人が高級車に乗せてきた雌犬ポメラニアンを地面に放つ。と、チャーリーのフランス生まれの血が騒ぎ、雌犬に近寄る。驚愕した婦人が愛犬を抱き上げようとして、誤ってチャーリーの顔を打つ。チャーリーは、当然のことだが、ロマンスに取りかかる前に、貴婦人の手をやんわりと噛む。婦人が天にも轟く悲鳴をあげ、スタインベックは、ブランデーを飲ませたりして、宥めるのに大童となるが、その間、騒ぎの張本人チャーリーは、ロシナンテ号に戻って、そ知らぬ顔で居眠りを決め込む。「チャーリーは、もともとノイローゼを憎み、飲み助は大嫌いである」。この貴婦人と、芭蕉の可憐な「かさね」とには、殆んど共通点はない。寧ろここでは、先述のフランス系季節労働者<カナック一家>の「くすくす笑ってばかりいる可愛い三人の少女」を引き合いに出すべきであったかもしれない。

Bの『おくのほそ道』全編でも最も哀切を極めるストーリーと心に沁みる名句「一家に遊女も寝たり萩と月」をもつ市振の段と、今から述べる「ハリーとルシル」の話と間には、これまた、確かに類似よりは差異のほうが目立つ。然しながら、二つの作品は、ともに、生きることの厳しさ、悲しさをモチーフとしており、また時代と、東と西と洋を隔てながら、作者の全くのフィクション、想像力の産物という点でも興味深いものなのである。
<市振>の章は余りにも有名なので、短い原文をそのまま引く：

今日は親知らず・子知らず・犬戻り・駒返しなどいふ北国一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引き寄せて寐(いね)たるに、一間隔(ひとま)て面(おもて)の方(かた)に、若き女の声二人計(ばかり)ときこゆ。年老たるおのこの声も交りて物語するをきけば、越後の国新潟といふ所の遊女なりし。伊勢参宮するとて、此関までおのこの送りて、あすは古郷(ふるさと)にかへす文したゝめて、はかなき言伝(ことづて)などしやる也。白浪のよする汀(なぎさ)に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契(ちぎり)、日々の業因(ごふいん)、いかにつたなしと、物云(いふ)をきくきく寐入て、あした旅立(たびだつ)に、我々にむかひて、「行衛(ゆくえ)しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見え隠れにも御跡(おんあと)をしたひ侍らん。衣(ころも)の上の御情(おんなさけ)に大慈(だいじ)のめぐみをたれて結縁(けちえん)せさせ給へ」と、泪を落す。不便(ふびん)の事には侍れども、「我々は所々にてとゞまる方(かた)おほし。只人(ただ)の行(ゆく)にまかせて行(ゆく)べし。神明(しんめい)の加護、かならず恙(つつが)なかるべし」と、云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家(いとつや)に遊女もねたり萩と月

曽良にかたれば、書とゞめ侍る。

芭蕉がフィクション化に当たって持っていたであろう素材のことは既に述べた。また『新古今集』、『撰集抄』での西行と江口の遊女の故事も芭蕉の念頭にあったたことは、昔から

諸氏の説く通りであろう。

市振の遊女と対になる『チャーリーとの旅』でのエピソードは、シカゴのアンバサダー・イースト・ホテルでの「淋しいハリーとルシル」の物語り（エピソード）（スタインベックの命名）である。アーサー・ミラー作、旅するセールスマンの悲哀を描いた戯曲『セールスマンの死』（1949）を思い出させるこの章段は、スタインベックの証言通り、始めから終わりまで彼の想像力の生み出したフィクションである。エピソードは、「序・破・急」の三段に分かれる。

<序>　ホテルへ予約は入れておいたが、朝あまりにも早く到着したスタインベックは、部屋の清掃とシーツ交換が終わるまで、ロビーで待たされる。豪華ホテルのロビーに、長旅で汚れきったスタインベックはそぐわない。むさ苦しいスタインベックを消去すべく、フロントマンが、正式にチェックイン出来るまで、掃除の済んでない部屋なら使ってよいと提案する。

> かくて難問は、知性と忍耐で解決され、双方の望みが叶った――私は熱い風呂とベッドを獲得、ホテル側は、目障りな私をロビーから退去させることができた。（ｐ８９）

<破>　案内された掃除の済んでいない部屋には、今朝チェックアウトした前夜の泊り客の痕跡が残っていて、それが小説家スタインベックの好奇心、（彼は「救い難い覗き趣味」と露悪家ぶる）、を刺激する。落ちていたクリーニング札、書き損じの妻宛の手紙、煙草の吸殻、ハイボールのグラスに残る薄い色の口紅、ジャック・ダニエルの空き瓶、香水の残り香、テイッシュ、ヘアピン、胃腸薬の包み紙から、スタインベックの空想力はみるみる膨らみ、遂に、昨夜この部屋に泊まった一人の中年ビジネスマンと、泊まることなく帰っていったブルネットの商売女との間で演じられた「淋しいハリーとルシル」という一編の物語を捏（でっ）ちあげる：

<急>　男性（仮名ハリー）はコネチカット州ウエストポートからニューヨークへ通勤する平凡なビジネスマン、商用でシカゴに一泊、見知らずの女性（仮名ルシル）と交渉をもつ。

> I don’t know whether or not Lucille is professional, but at least she is practiced. There is a fine businesslike quality about her. She didn’t leave too many things around, as an amateur might. Also she didn’t get drunk. Her glass was empty but the vase of red roses—courtesy of the management—smelled of Jack Daniel’s, and it didn’t do them any good. (p91)

> ルシルが商売女だったかどうか分からないが、仕事ぶりには事務的なところがあって、素人みたいに物を残して行かなかった。また酒も酔っ払うほど飲まなかった。彼女のグラスは空だったが、ホテルが生けた赤バラの花瓶は、ジャック・ダニエルの匂いがした。バラにウイスキーを飲ませても何の役にも立つまいに。（ｐ91）

しかし、一夜アバンチュールが、ハリーの淋しさを癒すことはなかった。独りになった男はジャック・ダニエルの残りを飲み干し、二日酔いになり、胃薬を服用し、それでも朝予定の時刻に出立した。結びの部分は、普段、軽快・洒脱なスタインベックには珍しく

沈鬱なトーンで語られる。

> 淋しいハリーに関しては三つのことが私の念頭を去らない；一つはハリーにはこの夜は少しも楽しくなかった。第二は彼は淋しい人間だった、それも慢性的にそうだった。三つ目は、彼は予想できない行動は何一つとらなかった――グラスも鏡も割ったりしなかったし、また、楽しかったことを示す証拠も残していない。ベッドの下や押入れを覗いたが、彼はネクタイ一本忘れて行かなかった。私には、ハリーが可哀相になった（ｐ92）。

Ｃの<等裁の妻>の章が、『源氏物語』「夕顔」を下敷きに、福井在住の隠士等裁との十年ぶりの再会を、「夕顔・糸瓜のはえかかりて、鶏頭・箒木(ははきぎ)に戸ぼそを隠す」あやしい小家を訪れると、彼の妻と思しき侘しげな女が顔を出し、無愛想に夫の外出先を教えると描写する。原典の幻想的雰囲気とはミスマッチな田舎妻の応答、更に尻を絡げて道案内する飄逸な隠士の姿を登場させることによって、芭蕉はまず、王朝世界の典雅な情趣を導入し、次にそれを巧みにパロデイ化する捻(ひね)りをいれて、この章段に、諧謔性を付与し、それによって、各段の情緒、語りが、均一且つ単調に流れることを防ぎ、ひいては、この紀行文全体の語り口に変化を与えることにも成功している。

『チャーリーとの旅』でのテキサス州は、人種差別問題で揺れていた60年代の南部ニューオーリンズと並んで、復路のスタインベックが拘(こだわ)った南部での「問題」の州であった。「問題」とは、テキサスを概括する物差しがないことである。更にスタインベックは、客観的にテキサスを眺めることは自分には出来ないと弁解する。というのは、彼の妻はテキサス出身で、妻の親類はニューヨークはじめアメリカ全土に住んでいるからである。テキサスは又、アメリカ中で最も個性的な州なのである。テキサス人(テキサン)は何処へ行ってもテキサス人(テキサン)である。テキサスとは何であるかという質問は、アメリカとは何であるかという質問のミニアチュア版である。

スタインベックは＜テキサス＞の章を、<福井・等裁の妻>と同様な諧謔交じりの文体で始める：

> 私（スタインベック）は、この物語を書き始めた時、遅かれ早かれ、テキサスに行かねばならぬと思ってそれを恐れていた。宇宙旅行者が銀河を避けて通るように、私も出来たらテキサスを擦り抜けたかった。しかし、テキサス州はあのビッグ・ハンドルを北に張り出し、南はリオ・グランデ川に沿ってだらりと垂れ下がっている。一度テキサスに入りこむと、脱出するのに長い時間がかかる、二度と出てこない人間もいる。
>
> 初めに言っておくが、テキサスを避けようと思っても、それは出来ない相談だ。私の妻はテキサス生まれ、姑も、伯父も、叔母も、従兄妹も、親類はみなテキサス出身である。地理的にテキサスを離れようとしても無駄である。テキサスはニューヨークの自宅、サグ・ハーバーの魚釣り小屋を通じて押し寄せる。昔パリでアパート借りたら、そこにもテキサス人がいた。呆れ返るほどテキサスは世界に充満している。ある時、フローレンスで、可愛いイタリヤ人の貴族のお嬢ちゃんを見かけて、私は父親に「この娘(こ)は、イタリヤ人には見えませんね。変なことを言うようですが、アメリカン・インデイアンに似てますよ」と言った。と、彼女の父親は答えた、「そりゃそうでしょう。この娘のお祖母さんはテキサスのチェロキー族ですから」。（ｐ１７３）

テキサスを要約する普遍的原理は存在しないとスタインベックは言う。「テキサスは心の状

態、強迫観念、そして何よりも、言葉のあらゆる意味で、一つの国である」。そう断った上で、彼はテキサス性を解明する普遍概念（キーワード）の幾つかをを挙げてみせる。キーワードの一つはテキサス訛りである。彼の妻はニューヨークでは標準語を喋っているくせに、テキサスの親類でも訪れて来ようものなら、途端に“Yes” を「イア・エス」、“hair” を「ヘイ・アー」と二音節に、“ink” は「エンク」と発音し出す。州毎に変わるお国訛りは、アメリカ人のジョークの種としては打ってつけである。スタインベックは、娘がテキサス州オーステインでの滞在から戻って、ニューヨークの友人の家に遊びに行った時の逸話を語る：

> 娘は「ピンがありますか？」と訊いた。「あるよ、」と友人の父親が言った。「普通のピン、それとも安全ピン？」。「あたいの欲しいのは、万年筆（ファウンテンピン）なの」。原文は “Aont a fountainpin,” she said.である。（ｐ１７４）

スタインベックはこの後、テキサスを解くキーワードとも言うべき普遍概念を、あと半ダースほど列挙する。曰く、西部開拓の歴史で、殆んど最後のフロンテイアでなったテキサスは、「昔ヴァージニア州での極悪犯人への刑は、重い順に、死刑、テキサス流刑、投獄であった」と、流刑囚の開拓した州と中傷される。曰く、もし誰かが、対外的にテキサスやテキサス人を非難すると、熱狂的愛国主義者テキサス人からの集中砲火を浴びる。曰く、テキサス人は広大な土地、無尽蔵の地下資源から底なしのエネルギーを得る。途方もない規模の農場主、牧場主、石油王がテキサスの存在する。これらテキサス紳士は、最早馬に乗ることもないというのに、カウボーイハットを被り、ジーパンに乗馬靴を履く。また、テキサスには軍人志望者が多く軍国主義国家的雰囲気をもち、アメリカ全土でも最もパレードの流行る州である等々。スタインベックは、そして最後に、テキサスを言葉でうまく表現することは出来ないという結論に達する。

> 世界のほとんどの地方は、緯度・経度がいくらいくらで、土壌・空気・水質が化学的にどうか、植物・動物はどうかを説明すれば、それで済む。ところが、一方、寓話・神話・先入観・愛・憧れ・偏見が入り込み、冷静で明晰な評価を歪め、一種の強烈で、魔法にかかったような混乱が何時までも支配している地方もある。ギリシャがそうであり、そしてアーサー王が歩き回った英国イングランド地方がそうである。…テキサスもそうで、それはテキサスに物理的・地理的統一がないということでなくて、テキサスの統一は、心の中にある。それもテキサス人の心の中にあるだけでなくて、テキサスという言葉は、世界中の人間にとって一つのシンボルとなっている。「心の中のテキサス」という寓話は、人工的で、時には真実でなく、しばしばロマンチックでもある。しかし、だからと言ってシンボルとしての力が弱まることはない。（ｐ１７７）

スタインベックのアメリカ一周の旅での自らの見聞を基礎材料として、現代アメリカ人のアイデンテイテイを探ろうとする試みは、テキサス州がそうであったように、結局不可知論に到着することになる。我々読者は、スタインベックが、繰り返しアメリカとアメリカ人の的確な像を描くことがいかに困難かを告白するのを聞かされる。

ドン・キホーテ的冒険旅行の計画を友人に揶揄されて、スタインベックはアメリカ一周

旅行用のトラックを、ロシナンテ号と名付けた。そして、寂しさを紛らすために同乗者に選んだのが、サンチョ・パンサならぬチャーリーという愛犬であった。一方、序で紹介したように、ドナルド・キーン氏は、芭蕉をドン・キホーテ的空想力の持ち主とし、連れの曽良をサンチョ・パンサ的常識の人と規定していた。論の最後に、二つの旅行記での曽良とチャーリーの役割の異同に手短に触れる。どちらでも、同行者の存在は、一人称語りの旅行記述の陥りがちな単調さを救うという点で、必要不可欠であった。従って、『おくのほそ道』では、早い段階<室の八島>、<日光>で「同行(どうぎょう)」曽良が、読者に紹介され、以下最終章<大垣>まで、曽良への芭蕉の言及は十三箇所、曽良句は十一句に達する。同様に、『チャーリーとの旅』の冒頭で、この犬の風貌と特性に加えて、チャーリーが、一人旅の孤独と無聊を慰め、見知らぬ人との橋渡しの役をする「連れ(コンパニオン)」であったことが語られる。その後、旅が進むにつれ、折に触れ、チャーリーへの言及は、二十箇所を超える。尚、曽良が<山中>で病気のため斃れ一時芭蕉と別行動をとるのと、チャーリーが<テキサス州アマリロ>で、前立腺炎でダウン、一時スタインベックと別れて入院するのは、偶然の一致である。

『おくのほそ道』で、「木の花さくや姫」縁起を芭蕉に語る<室の八島>が、同行者曽良の神道への造詣を紹介、<日光>では旅立ちに際して剃髪した曽良の旅への決意を芭蕉が語る。<白川の関>では、曽良は芭蕉に代わって関越えの感慨を詠む。こういった意味では、曽良は単なる「道連れ(コンパニオン)」でなくて、時には芭蕉の「代役」をも務める重要な存在である。一方、『チャーリーとの旅』での同行者チャーリーは、いかに気心の知れたペットと云いながら、スタインベックとの意思疎通は、食事・生理的要求・機嫌の良し悪しなどのレベルに止まる。それでもスタインベックは、単調な一人称語りに変化を齎すべく、時には、チャーリーとの「会話」をも案出する。<ネバタ山中>、<カリフォルニア・フレモント山頂>、<ニューメキシコ大分水嶺>の三箇所で、スタインベックは、連れのチャーリーと「対話」を実行する。といっても、最初の二つは殆んどスタインベックの「独白」で終始する。最後だけが、人と犬の間での「人語」による「想像上の会話」である。旅また旅で、スタインベックの見聞は、飽和点に達していた。スタインベックの言葉では、マドリードのプラド美術館で百点もの絵画を眺めに眺めて、もう見ても何も見えない感じがしたように、自分はアメリカを眺めに眺めているのに、何か見ているというのに、何も見ていない状態に陥っていた。スタインベックは、この時、丁度大陸大分水嶺の真上に立って野営していた。無人の山地での退屈紛れに、スタインベックはチャーリーのために誕生祝いにケーキを作りながら、愛犬と空想の会話を交わす。

「(スタ) …何かちょっとした目覚しいことをしようか？　お前の誕生日は何時だ？」。

「(チャーリー) 知りません。馬のように一月一日で区切って勘定するのですかね？」。

「ひよっとしたら今日かな？」。

「分かりません」。

「ケーキをつくってやるよ。材料がないのでホットケーキ・ミックスだ、シロップを一杯かけて、蝋燭を立てよう」。

チャーリーは、ちょっと興味を持って私の作業を見た。彼の変てこな尻尾は、微妙な会話を喋った。「自分の

誕生日も知らない犬のために、誕生祝ケーキを作っている貴方を人が見たら、馬鹿だと思いますよ」。

「お前の文法は間違ってるぞ。尻尾でそんな文法しか話せないなら、喋れんのは良い事かも知れんな」。(169)

物言わぬ動物との、言葉によるコミュニュケーションは、スタインベックの辣腕をもってしても、決して巧く行かないようである。

跋

アパラチア山脈は、大西洋プレートが、アメリカ大陸プレートとぶっつかって出来た最初の褶曲山脈で、メーン州から延々と南部アラバマ州バーミンガムまで南北に連なっている。ところによっては、１０００メートルを超すこれら山脈は、初期開拓民の馬車による山越えを阻んだ。西部に進出できずにアパラチア山地に停滞、住み着いた南部の農民は、細々と玉蜀黍や煙草の栽培で生計をたててきた。これら零細農家は、その後の経済繁栄にも取り残され、プアーホワイトとして今も知られている。

十年ほど前に、NHK が、アメリカ合衆国東部地方のアパラチア山脈の尾根を巡り歩く数多くのアメリカ人の映像とインタビューを放映したことがあった。確か「アパレイチャン・トレッカー」(以下、トレッカーと略記）とかいうタイトルだったと記憶するが、正確ではない。撮影場所は、ペンシルバニアからバージニアにかけての東北山地の従走路(トレイル)であった。季節が偶々夏だったので、トレッカーたちは、野球帽、白のＴシャツ、短パンツ、サンダルまたはスニーカーというアメリカ男性アウトドア定番の服装で、リュックを背負い、何故か殆んどが二本の杖を突いて歩いていた。トレッカーたちは殆んど中高年の男性で、それも単独行であった。唯一の例外は、係員に引率された三十名ほどの非行少年少女の一団で、彼らは社会復帰のカリキュラムの一環としてトレッキングに参加していた。

トレッカーたちの証言によると、職業はビジネスマン、金融・証券マン、エンジニア、元兵士と様々だったが、トレッキング参加の目的・動機は酷似していた。アメリカ競争社会での日常生活で見失った自己の再発見、自信の回復、自己鍛錬、元兵士の場合は戦場でのトラウマからの脱却であった。トレッキングは、原則として北部山系からはじめ、南下するにつれて歩いた距離を示す道程標が立てられおり、完歩点(ゴール)も定められていて、何となくスポーツ的雰囲気がある。トレイルの要所には、簡単な炊事と仮泊の場所はあるが、長期間歩き続ける者は、一時トレイルより降りて、麓のピードモント台地に点在するコインランドリーや、モーテルで洗濯・入浴の必要を満たす。中には、町のモーテルで待機している妻や子供と二三日を過ごして、再びトレッキングに戻る者もいた。

ヒッコリー、ブナ、ニレ、カエデなどの落葉広葉樹と針葉樹の混在するトレイルを、ただ一人黙々と辿るこれらのアパレイチャン・トレッカーの映像を眺めながら、筆者は絶えず、日本の遍路たちのことを考えていた。菅笠・白衣・脚絆・頭陀袋の行脚スタイルで、杖を突き三々五々、四国八十八箇所の霊場を巡る和やかな男女の遍路たちと笑顔で出迎える地元の人々の姿は、不思議にアパレイチャン・トレッカーたちに似ており、またひどく

異なってもいた。ともに、求道のための行脚の旅である点では類似しているが、目的は相違する。アメリカ男性トレッカーたちが一人旅での肉体的試練を通して、独力での自己確認・自己救済・自信回復・社会復帰を目指しているのに対して、日本の男女の遍路たちは、弘法大師を通じての他力本願、阿弥陀仏への帰依を祈念して、グループをなして霊場を遍歴する。

日本の遍路と異なり、チャーリーを連れてのアメリカ一周の旅でのスタインベックの目的は、老齢にさしかかった自己の回春、マッチョの証明、創作の原点への回帰であり、そのためにはヒンズー教の苦行者にも似たハードな一人旅を必要とした。チャーリーという連れはあくまで無聊の慰みであって、スタインベックの単独行にはアパレイチャン・トレッカーたちと一脈相通じるものがある。

芭蕉も行脚僧に身を窶(やつ)して、曽良を同行(どうぎょう)と呼んでいる。芭蕉には、無常観や、一所不住の人生観を体得する修行実践の場としての旅への自覚は強かったが、仏教的悟道、ましてや他力本願的志向は薄かった。反俗の隠者の心境を経て、先覚西行に見られる漂泊者としての風狂、さらに風雅へと変わってきた芭蕉の志向では、「ほそ道の旅」はあくまで流行不易を感得する修行の場であった。流行する自然の移り変わり、転変する人間の営為の中の普遍的真実を、艱難な旅先々での人々との触れ合いを通じて感得せんとする芭蕉の姿勢は、従って、孤独な苦行者のそれでなくて、人々との一期一会を尊ぶ風騒(ふうそう)の人のそれであった。

（終わり）　　2009 年 6 月 30 日